

不動の築地塀

— 教王護国寺(東寺) 東築地塀の調査 —

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(公財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

はじめに 教王護国寺(東寺)は、平安京遷都から間もない延暦15年(796)に創建されたと伝えられる由緒ある寺院で、落雷や戦乱による被害に何度も遭いながら、そのたびに再建され、国宝・重要文化財を含む数々の仏像や宝物を現在に伝えています。そして、伽藍の四方を囲む築地塀にも1200年の歴史が詰まっていることが、東築地塀の解体修理にともなう発掘調査により明らかとなりました。

東築地塀の構造 築地塀とは、屋根を葺いた土塀のことです。現在の東寺の築地塀は総延長約900mあり、東築地塀は中央の東大門を挟んだ北側と南側にそれぞれ約120mの長さで築かれています。

土塀の部分は、基底部幅約2.3m、上面幅約1.2m、高さ約3mの台形で、約3m間隔で据えられた礎石の上に柱を立て、梁・桁や茅負などの屋根材を組み上げて瓦を葺いています。地表面から屋根頂部までの高さは約4mになります。また表面は、荒壁の上に数工程の丁寧な上塗りが行なわれ、さらに東寺が最高の格式をもつ寺院であることを示す5筋の水平線が漆喰で表現されています。

慶長期の築地塀 現存する東築地塀の大部分は、文禄5年(1596)の大地震で崩壊した後、豊臣秀頼によって慶長3年(1598)頃に再



東築地塀断面(南東から)

建されたものです。大部分は土を叩き締めて層状に積み上げた版築工法で造られていますが、中程で手法が異なっていることが判明しました。

版築下部は、5cmから10cmの厚みで何層にも土を積み重ね、固く叩き締めていました。しかし、版築上部は、両側の土を土手状に叩き締めてから、間に石や瓦片が



平安時代前期の築地塀寄柱礎石



平安時代前期の築地塀と下層の自然流路断面

混じる土を入れて上面のみを叩く手法で造られたため、中心部分は縮まりがほとんどありません。

このような手法を採った理由には、①工期の短縮、②重量の軽減、③構造の強化という3つの可能性が考えられます。①については、丁寧な版築は時間が掛かるので手間を省いたのででしょうか。また、柱の裏側が空洞になっていたり土の縮まりが悪かったりすることから、柱と柱の間を作業単位としていたことが考えられ、割当分を早く完成させる競争が行なわれたのかもしれません。②については、土を叩き締めれば重量が増すので、上部の重さで下部が崩壊することを防ぐためと考えられます。③については、上部は屋根が雨を防ぎますが、下部は雨垂れなどにより傷みやすいため頑丈に仕上げたと考えられます。

不動の築地塀 慶長期の版築の下層には、かまぼこ状に室町時代の築地塀が残っていました。版築は10cm未満の厚みを単位としており、残りのよい所では約40cmの高さがあります。工法的には、いったん平坦にして新たな版築を行なう方が合理的ですが、古い築地塀

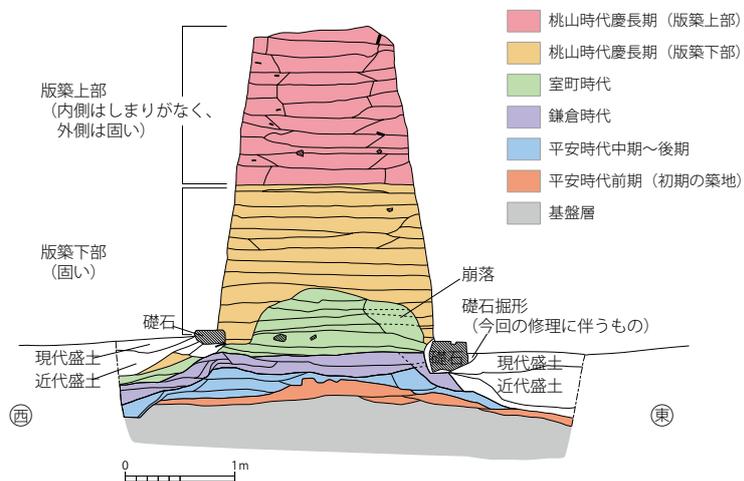
を残したことは、やはり工期の短縮を目指したのかもしれませんが。

鎌倉時代の築地塀は、現在の地表面下で確認しました。10cmから20cmの厚さがあります。また、平安時代中期から後期のものは、10cmから50cmの厚さで残り、東へ崩れたようすが観察できました。

平安時代前期の築地塀は、東大門の北と南で造り方が異なっており、北側は固い粘土層を台形に削って基底を造り、その上に約5cmの厚さを単位として土を叩き締めていました。南側は自然流路堆積土上に版築を行なっていました。この流路堆積土からは、8世紀末から9世紀初頭の土器片が出土したことから、築地塀は主要伽藍の造営からやや遅れた9世紀前半に

造られたこととなります。また、基底部の東西両側で見つかった築地塀寄柱の礎石の間隔が約2.1mなので、東築地塀の幅は平安宮を囲む築地塀と同じ7尺の規模で造られたことがわかりました。平安時代の法制書である『延喜式』によれば、本来ならば大宮大路に面する築地塀基底部は6尺の規模です。鎮護国家の寺として東寺が別格の扱いを受けていたことが注目されます。

平安時代の版築を基礎として、現在に至るまで、同じ位置に版築が積み重なっているようすは、悠久の時の流れを感じることができる貴重な歴史的遺産といえるでしょう。(近藤奈央)



築地断面模式図